

自我と役割——その価値論的考察

瀬 在 良 男

The Axiological Approach to the Problems of "Self" and "Role"

Yoshio Sezai

This paper is an introductory study for the behavioristic approach to value.

I think, as the fundamental method of such an approach, it must be possible to understand the theory of value as follows;

- (a) the theory of the preferential system of action.
- (b) the theory of the social system of action.

The former (a) characterizes as the "*selectiv-rejective behavior*" the human behavior, and examines the value approach connected with the function of purpose and cognition in the human behavior from the standpoint of psycho-biological analysis of the value phenomenon.

The latter (b) characterizes as the "*role-taking behavior*" the human behavior, and examines the value approach connected with the function of socialization in the human behavior from the standpoint of psycho-sociological analysis of the value phenomenon.

In this paper, I treated as the subject of this paper a case of the latter (b).

And, I verified, in this examination, the reason which is understood as the value is the *social*, the *functional*, and the *normative* from the following problems;

- (1) the problem of selfhood and role-taking behavior
- (2) the problem of value-situation and process of "socialization" in the human behavior

And, in the last of this paper, I found the following conclusion from this verification.—Value theory is the theory of scientific inquiry of the "attitude".

〔1〕 問 題 の 視 点

この小論は、価値探求の問題を行動理論の枠内でとらえ、価値論の行動論的アプローチのための一環としてまとめられた「価値論と行動論の原理的研究——その一、価値現象の心理、生物学的分析」⁽¹⁾、「価値論と行動論の原理的研究——その二、その関係理論の主題確立のために」⁽²⁾、「社会心理学における『役割理論』の価値論的考察」⁽³⁾、『『役割取得行動』の理論とその価値理論』⁽⁴⁾ および「人間行動の多重性と『価値』の機能連関説」⁽⁵⁾と一連の関係をもっている。

そこで、これら一連の論文と同様に、この小論もまた、価値論の行動論的基礎づけのための前提的方法として、価値論を

(a) 「行動の選択体系」の理論 (theory of the preferential system of action)

(b) 「行動の社会体系」の理論 (theory of the social system of action)

として捉えるという共通の方法論的視点にたっている、ということをまず明示しておきたい。

前者は、人間行動の基本的形態を「好－嫌選択行動」として捉え、方法論的に価値現象の心理、生物学的分析が重要な位置をしめることによって、人間行動の目的性と認知性との結びつきからする価値探求の傾向が際だって顕著である。

後者は、人間行動の基本的形態を「役割取得行動」として捉え、方法論的に価値現象の心理、社会学的分析が基本的に重要視され、とくに人間行動の社会化過程との結びつきからする価値探求という点に顕著な特色をもっている。

人間の行動は、基本的に生物的、心理的および社会的諸過程との密接な結びつきからなるものである。したがって、価値探求の問題を行動理論のうえに基礎づけるというこの試みは、

第一に、価値をひとり超越的な対象としてのみ捉えることなく、むしろ社会的、現実的な人間行動をめぐる生物的、心理的および社会的諸過程の枠内において、あくまでも人間的な機能として捉えるための、科学的人間研究の機関としての価値論の意義を鮮明に印象づけるものでなければならない。

第二に、価値探求の理論がその新しい傾向として、たとえば選択行動理論

(preferential behavior theory), パーソナリティ理論 (personality theory), 社会体系理論 (social system theory), 文化の機能理論 (functional theory of culture) などとの融合をはかりながら, 人間行動の実証科学的研究をめざす, いわゆる行動科学の重要な研究領域と目されているという点からも明らかなように⁽⁶⁾, 諸科学相互間の「中間領域理論」もしくは「交叉領域理論」の開発と, それにともなう科学共同体の形成という, 現代科学の課題に積極的に参画するものでなければならない。

しかし, 価値論の行動論的アプローチというこの試みは, その試みの多岐性と遍在性のゆえに, いまだコンクリートなものをもっていない, というのが実状である。また, 価値探求の基礎理論である行動理論それ自体, 社会諸科学のなかに内在されている共通項として, これに基礎理論としての統一性を与えるための有効な理論ではあるが, しかし学説史的な整理もその諸源流の統一的理解という観点からまだ十分に行き届いていない, というのが現状であろう。

それゆえ, この小論は, 筆者自身の入門的順序にしたがって, 行動理論の諸源流のうち, とくにボールドウィン(J. M. Baldwin), クーリー(C. H. Cooley)などを経て, ミード(G. H. Mead), モレノー(J. L. Moreno), リントン(R. Linton)などによって精緻な体系化をみた, いわゆる「役割理論」(role theory)の場合をとりあげ, これを価値探求のためのひとつの基礎理論として位置づけることによって,

(a) 価値論の行動論的アプローチの前提的方法として, 価値論をとくに「行動の社会体系の理論」として捉えるための方法論的意義の問題を考慮にいれながら⁽⁷⁾,

(b) 結論的に, 価値の機能連関説の立場から, 当為(ought)の事実(is)に対する従属関係の問題に言及しようとするものである。

〔2〕 自我性(selfhood)と役割取得行動(role-taking behavior)

価値論の行動論的アプローチの前提的方法として, 価値論を, とくに「行動の社会体系の理論」として捉えるためのひとつの理論的原型は, 価値現象の分析を

人間行動の心理，社会的過程の側面からおこなう一方，人間行動の基本的形態を「社会的行為」(social act)ないし「象徴的相互行為」(symbolic interaction)として捉えるミード流の社会的行動主義(social behaviorism)と，ある意味においてはその理論的發展の形態として考えられる，いわゆる「役割取得行動」の理論(theory of role-taking behavior)のうちに見いだすことができる。

ところで，この役割取得行動の理論にみられる基本的特色は，一般に

(a) 個人相互間の行動がすべて「役割」(role)のなかに組織化されるということ，それゆえ「役割」は人間の社会的行為の重要な単位である，ということ。

(b) 「役割」に対応するものとして「自我」の概念を重要視し，結局自我を役割の反映として捉えることによって，「自我と役割の相互作用」(self-role-interaction)という特殊な社会心理学的図式化を採用する，
という形でとらえられる⁽⁸⁾。

このように，パーソナリティや自我の形成を「役割」の内在化現象としてとらえ，かつ社会的相互行為の反映としてうけとめる役割理論は，歴史的に自我の社会的形成という観点から，とくに児童における自我形成の理論的展開を試みたボールドウィンや，いわゆる自我性(selfhood)の理論を強調したクーリーを経て，その一層精緻な理論の体系化がミードによってなされた，と考えることができる。

周知のように，ミードは1909年の論文『生理学的心理学に対応する社会心理学』⁽⁹⁾において，マクドゥガル(W. MacDougall)によって想定された行動の心理的原動力，たとえば「本能」(instinct)といったような生物学的単位にかえて，むしろ「社会的行為」(social act)をもって社会心理学の出発点とみなす試みを明らかにしている。その場合，本能をダーウィンの進化史の延長とみなし，いわゆる本能心理学の立場から社会心理学の展開を試みるマクドゥガル流の生理学的，生物学的心理学に鋭く対立して，むしろ人間の社会的行為，もしくは社会的相互行為をもって社会心理学の中心課題とみなすミードの試みは⁽¹⁰⁾，その最大の特色を次のように要約することができるであろう。

第一に，人間の心理活動，たとえば精神とか自我を社会的相互行為の反映として捉える，ということ。

第二に、社会的相互行為を個人行動の母型とみなしている、ということ。

なお、ミードのいう「社会的行為」もしくは「社会的相互行為」は、これをウェーバー (M. Weber) の用語でもってするならば、「目的合理的」(zweckrational) 行動と同義に解することができる⁴¹⁾、と考えられる。またそれは、ワトソン流の機械論的な生物学的行動主義の行動理論 (S-R) に対して、むしろ目的的行动主義の行動理論 (S-O-R) を提唱したトールマン (E. C. Tolman) の巨視的、総体的行動 (molar behavior)⁴²⁾と一脈相通ずるものがある、と考えることもできるであろう。

一定の社会的環境のなかで営まれる人間の社会生活は、個人相互間の対人関係を基礎にし、目的合理的行動を媒介とした力動的、かつ複合的な社会的行為の体系からなりたっている。その場合、ミードがこのような社会的行為の分析にあたって、その基本的形態を「役割取得」の行動としてとらえ、さらにこの行動をパーソナリティ体系の単位である「自我」形成の社会的要因とみなす一方、このような行動ないしは態度の類型を、端的に「一般化された他者」(the generalized others) という形で捉えているというように⁴³⁾、役割理論は基本的に自-他の相互行為(インタラクション)と密接なかかわりをもつものである。それゆえ、こんにち役割理論の慣用語として、たとえば適合 (conformity) とか期待 (expectation) といった名称が重要視されるということ、あるいはまたマートン (R. K. Merton) の「ロール・セットの理論」(theory of role-set)⁴⁴⁾や、ワラー (W. Waller) とヒル (R. Hill) の「連動的習慣体系」(interlocking habit system) の理論⁴⁵⁾の意味するところのものも、結局自-他の相互行為をめぐる「役割」概念の規定づけのための拡張解釈として考えることができるのである。

ところで、前述したように、自-他の力動的、かつ複合的な社会的行為の分析にあたって、ミードはその基本的形態をなす「役割取得」の行動の分析から出発しているが、その場合最も印象的、かつ特徴的なことは、

第一には、「役割」が態度とか行為の類型として、いわゆる「役割期待」(role expectation) という形態において捉えられている、ということである。

この「役割期待」は、潜在的な自我反応という形で捉えられる行為の形式であ

って、サービン (T. R. Sarbin) は、これを「刺激条件と遂行される行為との媒介変数」として特色づけている⁹⁰。その場合、役割期待を、たとえば独立変数 (independent variables=S.v.) と従属変数 (dependent variables=R.v.) との媒介変数 (intervening variables=L.v.) といった形で捉えるトールマン (E. C. Tolman) の「行動の心理学的モデル」の理論⁹¹や、役割期待の社会心理学的分析の立場から、これをパーソナリティ体系における「欲求傾向」(need-disposition) の機能、社会体系における「行為の方向づけ」(orientation of action) の機能、さらには文化体系における「価値志向」(value-orientation) の機能として捉えるパーソンズ (T. Parsons) の行為理論⁹²などにみられるように、いずれもこの役割期待を潜在的な自我反応という形で捉えている、ということは特徴的である。

第二には、「役割」が記号とか言語という一種の象徴的行動 (symbolic behavior) と密接な関係をもっている、ということである。

幼児における言語の発生が、とくに自我の社会的形成の問題と密接に結びついているということは、ボールドウィン (J. M. Baldwin), クーリー (C. H. Cooley), サービン (T. R. Sarbin), あるいはピアジェ (J. Piaget) などによって指摘強調されているところである。しかし、ミードが幼児の発達過程における「遊戯行動」(play acting) の面から、とくに役割取得行動と象徴的行動との機能をおよそ次のように捉えているということは、社会心理学における「役割理論」の理論的原型をなすものとして特記さるべきであろう。

(a) 第一は、潜在的な想像的过程 (imaginative process) を、役割取得行動の中心的位置に据えこんでいる、ということである。なお、役割取得行動にみられる想像的过程の重要性は、たとえばモレノ (J. L. Moreno), キャメロン (N. Cameron), サービン (T. R. Sarbin) などによってもまた同様に指摘強調されているところである。

(b) 第二は、社会的自我の先在性を認めず、むしろ役割取得行動にもとづく象徴的行動の反映として捉えている、ということである。

その場合、ミードのこのような行為理論がたとえば「象徴的相互行為理論」(symbolic interaction theory)⁹³として特色づけられるというように、ミード

が象徴的行動の最も典型的、かつ具体的な形態として、「身振り」(gesture)による身体的象徴の表現に着目したということは、行為理論によせるミードの基本的構想が、「役割理論」を一種のコミュニケーション基礎理論として位置づけ、ひとり「記号」(シンボル)の行動論的分析のみにとどまらず、「価値」の行動論的分析に対してもまた向けられておった、と考えることができるのである。

〔3〕 価値状況と行動の社会化過程

科学的人間研究の枠内での価値探究の重要性を鮮明に印象づけ、とくに社会的自我とむすびついた自我性と役割取得行動の分析から、価値の行動論的分析を志向するミードによれば、価値は完全な社会的行為と同義であり、「一般化された他者」もしくは「一般化された社会的態度」といったような、社会的行為の基準的な目標状況へ到達しようとする欲求ないし態度の函数である、と考えることができる。

かつて、ペッパー (S. C. Pepper) がペリー (R. B. Perry) にみられる自然主義的「興味」(interest)理論のあとをうけて、目的行動のなかに価値の源泉を見いだしたように¹⁰⁾、あるいは人間行動の基本的形態を「選択-否認の行動」(selective-rejective behavior)として捉えるデューイ (J. Dewey) が、その評価理論の展開にあたって、「目的と手段の連続」(continuum of ends-means)の理論を重要視しているように¹¹⁾、これらはいずれも価値が一定の目標状況へ到達しようとする欲求とか態度と相関的である、ということを示すものにほかならない。それゆえ、価値は人間の目的行動をはなれては考えられないものである。

ところで、価値を社会的行為における機能上の要請とみなすミードは、自我と役割の力動的な関係を示すものとして、「状況」(situation)という概念の設定を試みている¹²⁾。この「状況」という概念は、社会的行為の目標となるべき有意義な行動のデーターであって、これを「価値状況」(value-situation)とよぶことができる。その場合、ミードはこの価値状況を、主体的自我(the "I")に対する客体的自我(the "Me"), つまり「一般化された他者」もしくは「一般化された社会的態度」という社会的行為の形式として捉えている点に注目したい、と思う。

人間行動を「社会的価値－態度」(social value-attitude)の相互作用の図式でとらえ、しかも目的的、有意味的活動として特色づけるトーマス(W. I. Thomas)の社会行動論や、価値と態度との相互作用が一連の刺激(S)―反応(R)の綜合体を形成するということを説くリントン(R. Linton)の「価値－態度体系」(value-attitude system)の理論と同様に、「価値状況－態度」の図式でもって行為の社会化過程の分析を試みようとするミードの構想は、

(a) 人間行動のメカニズムを、「態度」(attitude)という行為の形式において捉えている、ということ。

(b) しかも、「態度」が機能的に内含する社会化(socialization)の過程のなかに、「同一化」(identification)の傾向の内潜されていることを指摘証明したものとして、「行動の社会体系の理論」としての価値論によせるミードの以下のような価値理論の特色を裏づけるのに十分である。

役割取得行動の社会化過程にみられる社会的価値に対する内面的、かつ潜在的反応としての「態度」との相関関係から、価値の行動論的分析を試みようとするミードの価値理論は、その最大の特色を次のように要約してみることができるであろう。それは、社会的行為の基本的単位としての「役割」(role)の概念を価値理論のなかに挿入し、社会化過程の中心的メカニズムを「同一化」の発達に求めた「価値－態度」の機能連関説の立場を鮮明にしている、ということである。

社会化過程にとって欠くことのできないメカニズムは、「同一化」の発達である。この「同一化」には、

(a) そのモデルとなる「価値」を内面化すること、

(b) 行為者としての個人の特定の「役割」を内面化すること、

という二つの意味があると考えられるが、その場合社会化過程において、内面化されるものはいずれも価値のパターンである。しかも、価値のパターンはそれ自体社会的なものであり、したがって社会的規範に相当するものであって、特定の文化パターンを形成するところに特色がある。

元来、文化パターンは行為者の社会化過程において、パーソナリティ体系と社会体系を構成するための重要な要素となるものである。有機体としての人間の行

動現象はパーソナリティ体系によって統合され、しかもパーソナリティ体系は、一方では社会体系と相互に滲透しあい、他者との同一化ないし内面化によってパーソナリティの形成がなされ、他方では社会的規範の内面化ということで、文化体系と相互に滲透しあうものである。その場合、行為の諸体系のあいだに相互滲透性をみることによって、行為理論の立体化をはかろうとするパーソンズが、とくに「役割期待」の社会心理学的分析の立場から、パーソナリティ体系における「欲求傾向」の機能 および 社会体系における「行為の方向づけ」の機能に対する文化パターン⁴⁴、とくに「価値志向」の機能のはたす決定的な役割とその意義を指摘強調している点からも明らかなように、パーソナリティ体系にせよ、社会体系にせよ、すべての具体的な行動体系は必ずひとつの文化体系を内含しているのが実状である。

人間行動は、一定の文化的基準ないし規範に従おうとする傾向を内蔵している。しかも、人間行動が内蔵するこのような傾向は、必然的に「社会化」という過程をとまなうのが常である。社会的行動をもって人間行動の基本的単位とみなす限りにおいて、「役割」(role)の問題が文化体系における重要な分析単位として、今日の社会心理学において重要視される決定的理由もこの「社会化」の問題との関連にある、と考えられるのである。

ところで、前述のように、社会化の過程のなかに、「同一化」という内面的な自我反応が内潜されているということを指摘するミードの行為理論の最も特徴的なことは、この「同一化」という自我反応を「態度」(attitude)として規定している、ということである⁴⁵。元来、「態度」という概念は、ラテン語の《aptus》から派生したもので、たとえばその派生語である《aptituss》(整合性)が示すように、行動への準備をおこなう主観的な精神過程を内蔵した適応性という意味をもっている、と考えられる⁴⁶。その場合、このような精神過程の動因、つまりそれによって一定の行為を動機づけたり、またそれに対して一定の行為を方向づけたりする動因となるもの、それを「価値」として規定することができるのである。それゆえ、「価値」は社会化過程において、「態度」という内面的な反応を惹起する一連の刺激となるところのものである。しかも、「価値」は、社会化過程にお

ける共通の関心の対象となるものである限りにおいて社会的なものであり、社会的行為そのものをとおして経験的に正当化されるものでなければならない。

「価値」は、実に社会的行為の力動的な姿の対象そのもののなのである。

〔4〕 む す び

「役割取得」の行動にみられる 社会化の過程を 人間行動のひとつの基本的形態として捉えることによって、価値理論をとくに「行動の社会体系の理論」として位置づけようとするこの小論の試みは、価値探求の問題を行動理論のうえに基礎づけるといふ、価値論の行動論的アプローチのための前提的方法として選ばれたものであって、行動論的価値論の研究の基礎理論を地固めするための序章をなすものである。

しかし、価値理論を「行動の社会体系の理論」として位置づけようとするこの試みは、本来価値理論と行動理論との関係理論の主題確立という要請にもとづくものであって、したがって価値現象の心理、生物学的分析を主題とする「行動の選択体系の理論」との間には、たがいに分離しがたい相互連関性をもっていなければならない。それは、人間行動が基本的に生物的、心理的および社会的諸過程との密接な結びつきの上になりたっているということ、したがって価値を超越的なものとして捉える以前に、社会的、現実的な人間行動をめぐる個人（パーソナリティ）、社会、文化の三重の枠のすべてをとおしてあくまでも人間的な機能として捉えなければならない、という理由からである。

それゆえまた、科学的人間研究の機関として価値論の行動論的アプローチを位置づけ、方向づけるということは、価値を社会科学の価値、社会科学における価値、つまり単に科学的対象としてのみ規定される価値それ自体を取り扱うことではなく、むしろ理念としての価値を記述的、経験的に意味づけるところのものでなければならない。したがって、価値概念の基本的性格は、さしずめ次のように特色づけられなければならないであろう。

(1) 価値は、社会的なものである。

それゆえ、価値もしくはその基準は、社会的行為をとおして経験的に正当化さ

れるものであり、行為の目的構造および価値志向構造において、記述的に捉えられうるところのものでなければならない。したがって、このことをさらに敷衍するならば、当為(ought)としての価値は事実(is)との従属関係において経験的に正当化されるものである²⁰⁾、と解釈することができるのである。

(2) 価値は、機能的なものである。

それゆえ、価値は特定の社会的、現実的な状況内における目的行動と相関的であって、特定の目標状況もしくは価値状況へ到達しようとする「欲求」とか「態度」の函数である、と考えることができる。したがって、人間の社会的な目的行動にみられる刺激(S)に対する反応(R)という過程が、価値によって行為を動機づける「動機づけ志向」(motivational orientation)と、価値によって行為を方向づける「価値志向」(value orientation)の機能から分析できる、というのもこのためである。

(3) 価値は社会的、機能的なものであると同時に、規範的ないし基準的なものである。

行為の規範ないし基準としての価値は、社会的行為における「同一化」という社会化の機能によって内面化され、意味づけされるという点において、行為の「意味」として考えることができる²¹⁾。行為の規範ないし基準としての価値が、行為の社会化過程における目標状況として、「態度」という内潜的反応傾向を惹起する一連の刺激である、と考えられるのもこのためである。

(4) 価値論は、それゆえ「態度」の科学的探求の理論である。

注

- (1) 『精神科学』第5号, 昭和41.3, 日本大学哲学研究室
- (2) 『研究紀要』第9号, 昭和41.12, 日本大学人文科学研究所
- (3) 『社会学論叢』第36号, 昭和42.3, 日本大学社会学研究室
- (4) 『研究紀要』第10号, 昭和42.12, 日本大学人文科学研究所
- (5) 『精神科学』第7号, 昭和43.3, 日本大学哲学研究室
- (6) cf. R. Handy & P. Kurtz (eds.): A Current Appraisal of the Behavioral Science, Sect. VI & VII, 1963.
- (7) 価値論の行動論的アプローチのための前提的方法として、価値論を「行動の選択体系の理論」として捉える試みについては、注(1), (2)および(5)の拙稿に詳しい。

- (8) ミードの“interaction”の概念を継承して、「役割理論」の基本的原理を「自我と役割の相互作用図式」という形で捉えたものとして、次のものがあげられる。

T. R. Sarbin; Role Theory, in G. Lindzey (ed.): *Handbook of Social Psychology, Vol. I, Theory and Method*, 1954.

なお、B. Biddle & E. J. Thomas: Role Theory—*Concepts and Research*, 1966. は、「役割理論」の研究の史的考察の面から、その方法論の多様性を綿密に整理したものとして注目に値する。

- (9) G. H. Mead: Social Psychology as the Counterpart to Physiological Psychology, in *Psychological Review*, VI, 1909, pp. 401—408.

- (10) ミードのこの試みは、心理学を生物学的心理学と社会心理学とに二分し、後者をもって心理学の中心分野とみなすデュエーイの構想とたがいに共通する一面をもっている。(cf. J. Dewey: The Need for Social Psychology, in *Psychological Review*, XXIV, 1919, pp. 266—277.)

- (11) ウェーバーの「行為の目的合理的方向づけ」の概念との意味連関から、ミードの行為理論を「目的合理的」行為理論と特色づけたものに、たとえば次のものが挙げられるであろう。

S. M. Strong: A Note on G. H. Mead's Philosophy of the Act, in *American Journal of Sociology*, Vol. 45, 1939, p. 71.

- (12) cf. E. C. Tolman: A New Formular for Behaviorism, in *Psychological Review*, XXIX, 1922, pp. 45—53.

cf. E. C. Tolman: Purposive Behavior in Animals and Men, 1932, p. 7.

- (13) cf. G. H. Mead: Mind, Self and Society, 1934, pp. 154, 260.

- (14) cf. R. K. Merton: Role-Set—Problems in Sociological Theory, in *British Journal of Sociology*, Vol. 8, 1957, pp. 106—120.

- (15) cf. W. Waller & R. Hill: The Family—*A Dynamic Interpretation*, 1951, pp. 328—332.

- (16) cf. T. R. Sarbin: Role Theory, in G. Lindzey (ed.): *Handbook of Social Psychology*, Vol. I, 1954, p. 226.

- (17) cf. E. C. Tolman: A Psychological Model, in T. Parsons & E. A. Shils (eds.): *Toward a General Theory of Action*, 1951, pp. 279—364.

- (18) cf. T. Parsons: The Social System, 1951, pp. 38—40. T. Parsons: An Approach to Psychological Theory in Terms of the Theory of Action, in S. Koch (ed.): *Psychology—A Study of a Science*, Study I, Vol. 3, 1959, pp. 612—712. T. Parsons & E. A. Shils (eds.): *Toward a General Theory of Action*, 1951, p. 65.

- (19) cf. A. M. Ross: A Systematic Summary of Symbolic Interaction Theory, in A. M. Ross (ed.): *Human Behavior and Social Process—An Interactionist Approach*, 1962, pp. 3—19.

- (20) cf. S. C. Pepper: A Digest of Purposive Value, 1947, p. 39.

- (21) cf. J. Dewey: The Theory of Valuation, *International Encyclopedia of Unified Science*, Vol. II, No. 4, 1939, p. 60.
- (22) cf. G. H. Mead: *Mind, Self and Society*, 1934, pp. 273—281.
- (23) パーソンズは、文化パターンを「観念」(idea)ないし「信念」(belief)の体系、「表現的シンボル」(expressive symbol)の体系、および「価値志向」(value orientation)の体系に分類しているが、しかしこれら三つの体系のなかで、行為の方向づけにあたって、最も決定的な意義をもつものは、「価値志向」の体系である。(cf. T. Parsons & E. A. Shils, eds.: *Toward a General Theory of Action*, 1951, pp. 58—60.)
- (24) この点に関するミードの最も具体的な指摘については、G. H. Mead: *The Philosophy of the Act*, 1938, p. 445.を参照。
- (25) 「態度」という概念を社会心理学の枠内に導入し、社会心理学を「態度の科学的研究」の理論として方向づけたひととはトーマス(W. I. Thomas)である。トーマスによれば、「態度」とは社会的価値ないし規範に対する個人の意識過程として解釈される。しかも、「態度」は潜在的な目的、有意味的な行為の形式である。なお、この点について、オルポート(G. W. Allport)は次のような特色ある説明をくだしている。
- 「トーマス(W. I. Thomas)とヅナニエッキ(F. Znaniecki)によると、態度の研究こそ社会心理学の固有の領域である。……態度は、つねにある対象に向けられるものであるから、『価値に対する個人の精神的状態』と規定することができるであろう。」(cf. G. W. Allport: *The Historical Background of Modern Social Psychology*, in G. Lindzey, ed.: *Handbook of Social Psychology*, Vol. I, 1954, p. 45.)
- (26) ペッパー(S. C. Pepper)は、“ought”の経験的記述という観点から、“ought”を“is”の一種として捉えている。(cf. S. C. Pepper: *The Source of Value*, 1958, p. 362.)
- (27) 価値を、行為の「意味」として捉えるものに、たとえばカプラン(A. Kaplan)の場合があげられる。(cf. A. Kaplan: *The Conduct of Inquiry—Methodology for Behavioral Science*, 1964, pp. 32, 358—359.)

筆者紹介：

1927年に生まれる。1950年、日本大学文学部哲学科卒業。現在、日本大学文理学部教授。

主要著書：

『実存の分裂』(理想社)、『実存と分析の論理』(学芸書房)、『哲学の諸問題』(駿河台出版社)、『記号論序説——その歴史と体系』(駿河台出版社)